



齋藤徳元像

泉光寺所蔵 縦 93.5cm 横 40.6cm 紙本著色

亀甲文様の小袖に黒い薄物を羽織った齋藤徳元の像です。上部には「例ならず心ち死ぬべく覚えて 末期にはしにたはごとを月夜哉」の句に、「従五位下豊臣齋藤 斎頭 帆亭 徳元」と署名・花押をすえています。句は、「私がこの世を去る最期のときまで、名月にむかって戯言をつくのだ」と、俳諧師としての気概を述べたものです。徳元は正保4年(1647)8月28日に89歳で亡くなりました。本像は、その生前の確かな姿を伝えるものです。

(特別展「齋藤徳元」で展示)

特別展

アルカイク・スマイル ほほえみの考古学展

2007. 9. 11(火)～10. 21(日)

アルカイク・スマイルとはギリシャのアルカイク期（紀元前600～同480年頃）の彫刻に特徴的なほほえみの表情です。美しく自然な人体表現を追求した古代ギリシャ人たちは、生命感を吹き込む技法としてアーモンド形に目を見開き、頬を高くふくらませ、口端をつりあげた表情を彫刻に採り入れました。この印象的なほほえみは、中央アジア、東南アジア、中国、朝鮮、遠く日本の江戸時代の円空仏などにも通じるものがあります。

世界最古のほほえみを浮かべた彫刻を作り出したのは、紀元前2500年以降の古代オリエントの地でした。イラク南部の遺跡から出土した礼拝者像は、眼にはめられていた宝石が奪われてしまっていますが、その口端はたしかに上がっていることから、ほほえんでいることがわかります。やや上を向いたその顔は、神に対する尊崇と信頼の心を表わしたものと思われま

す。これに対して、1～2世紀初頭頃ギリシャ美術の影響を受けてガンダーラで始まった仏像彫刻では、ほほえみの表情をうかべているのは如来や菩薩です。伏目がちの切れ長な目と口端をあげた表情は、救済を求めて集まる人々に対し

て慈悲を示し、ほほえみかけているのです。

日本では、6世紀中頃に朝鮮半島から仏教が伝来するより以前から、埴輪や土偶にほほえみが見られます。しかし、横に細長い目と軽く開いた口は孔を開け



女性像頭部
キプロス 紀元前6世紀

て表現したものであり、角度によってかすかなほほえみを浮かべているようにも見えるが、無表情にも見える、というのがほとんどです。それは埴輪が墓上で



鬼子母神像 円空作
江戸時代 羽島市中観音堂蔵

祭祀・儀礼を表現するために作られたこととも関係があるのでしょう。

この展覧会では、世界各地の時代もさまざまなほほえみの表情を浮かべた造形を通じていにしえの人々の感性に触れ、また異文化を取り入れながら発展を遂げた古代文化への理解を深めていただけることでしょう。アルカイク・スマイルは誰にでもわかる「笑顔」を表現したものではありません。人によっては不気味に見えるかもしれない、この謎めいたほほえみがどうやって生まれたのか、思いを馳せてみてください。

関連行事

- ① 講演会「ギリシャのアルカイク美術」
9月16日（日）13:00～14:30
講師：東北大学准教授 芳賀京子さん
定員 200名
- ② 「円空彫りに挑戦」
9月30日（日）10:00～15:00
講師：美並円空同心会のみなさん
対象 一般 定員20名
- ③ 「ほほえみの造形を作ろう」
10月14日（日）10:00～11:30
講師：東海女子短期大学幼児美術講師
杉山章子さん
対象 小学1年～4年生 定員30名
- ④ 展示説明会
9月23、30日、10月7、14、21日
11:00～と14:00～
講師：当館学芸員

特別展

信長の岐阜まち発祥440年

道三ゆかりの武将俳諧師 斎藤徳元

2007.11.2(金)～12.2(日)

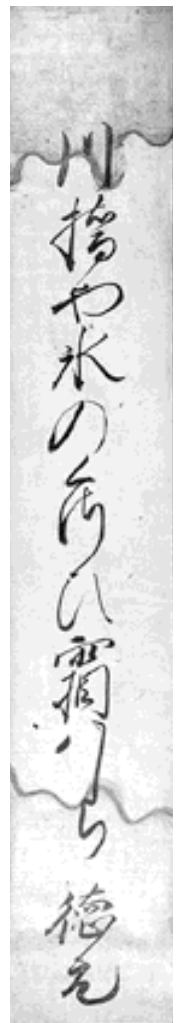
斎藤徳元は、永禄2年(1559)に岐阜に生まれました。父の斎藤正印軒は織田秀信の家臣で、正印軒の母は斎藤道三の娘です。つまり徳元は道三の外曾孫に当たります。

若き日の徳元は豊臣家に仕え、そののち織田秀信の家臣となりました。徳元はのちに入道してからの名で、この時期には斎宮頭などと称し、墨俣城主であったと伝えられます。18世紀中ごろに書かれた岐阜町の地誌『岐阜志略』には、真光寺(現在の岐阜市中大桑町に所在)が「斎藤斎宮」の屋敷跡と記載されており、秀信時代の岐阜城下町に居を構えていたと考えられます。しかし慶長5年(1600)8月、関ヶ原の戦いに先立つ岐阜城攻防戦において、陥落寸前の岐阜城から亡命しました。その後、若狭小浜の京極忠高のもとで俳諧師・斎藤徳元として歩み始めます。幕府に仕えた連歌師の里村昌琢^{しょうたく}に学び、貞門俳諧の盟主である松永貞徳らと交流し、晩年は江戸に移って、没する正保4年(1647)まで浅草に居住し、江戸俳壇の長老として活躍しました。江戸という新興都市に俳諧の芽を育て、俳諧の心得や用語をまとめた著書『俳諧初学抄』^{はいかい}は江戸における俳書出版の最初に位置づけられています。徳元の作品は優美な連歌や、大らかな笑いをもたらす俳諧の連句・発句だけでなく、前句付け、狂歌、仮名草子など多方面にわたり、マルチプレーヤーともいえる活躍ぶりを示しました。また徳元は連歌師・俳諧師だけでなく宮家・公家・武家・儒者・僧侶など各界の人々と幅広く交友関係を結びました。

岐阜は徳元の生地であり、武将として過ごした地ですが、その名はまだあまり知られていま

せん。本展は、40年以上にわたって徳元の足跡を追いつつ続けてこられた安藤武彦さんの御所蔵コレクションに加えて、全国各地にある関連資料を集めて開催する、徳元に関する初めての展覧会です。展示では、徳元的人物像が明らかにされてきた過程に始まり、系譜と武将としての前半生、俳諧師としての出発と作品群、交友圏の広がり、死去と子孫たちという5部構成で、その生涯と俳諧史・文化史上の役割を紹介します。激動期に生きた徳元という人物をより多くの方に知っていただく機会としたいと考えています。

徳元筆「川橋や氷のくさび霜はしら」安藤コレクション



関連行事

- ◆講演会 いずれも午後2時～
11月3日(土祝)
元 園田学園女子大学教授 安藤武彦さん
「道三ゆかりの武将俳諧師 斎藤徳元」
11月11日(日)
帝塚山学院大学名誉教授 鶴崎裕雄さん
「戦国武将と連歌 ー斎藤徳元の土壌ー」
11月18日(日)
元 園田学園女子大学教授 安藤武彦さん
「徳元の俳諧を読む」
- ◆連歌の再現
12月2日(日) 午後1時～4時
島津忠夫さん(大阪大学名誉教授)と連衆の皆さん
- ◆投句
会期中に受け付け、岐阜新聞の俳句選者により選を行います。
- ◆展示説明会
11月4日・25日(日)
いずれも午前11時～午後2時～
当館学芸員

加藤栄三・東一記念美術館

加藤栄三・東一が描く

生命の賛歌

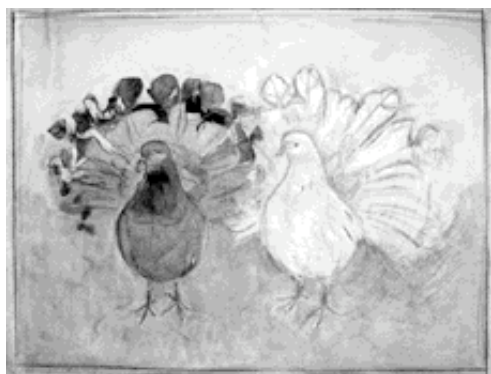
2007. 9. 19(水) ~ 2008. 1. 27(日)

岐阜市美殿町出身で、日展を中心に活躍した日本画家：加藤栄三・東一兄弟の作品をながめると、そこには一貫して「生きる」ことの素晴らしさ大切さを描いているように感じます。つまり「生命の尊厳」をうたっているのです。

故美保子夫人は「主人（栄三）は旅から帰ってきて、子供は大丈夫かという前に、小鳥は達者かって言うんです。人に対してもそうでしたけど、小さな鳥や花に対しても優しい人でした。」と語っています。

また、山口県下関市を訪れたとき、源氏に追われ壇ノ浦の戦いで平家一門とともに5才という幼さで入水し果てた安徳天皇の陵墓の前で、その運命のはかなさに号泣したといえます。

栄三の描く作品には、この心のやさしさが表現されています。



栄三作「孔雀鳩」

今回は、栄三がこよなく愛した小鳥の素描「千鳥」「きびたき」「めじろ」「背黒せきれい」とともに、多摩公園でジャワ牛を大胆に描いた日展出品作「BANTING（牛）」を展示します。

東一は、ある対談で「生と死」について次のように語っています。

「私にとって“絵とは何か”と問うことは、生きるとはということと死ということ、生と死はまったく紙の表と裏でしょう。絵とはなにが生きるとはどういうことか、生があれば絶対に

死がある。だから逆説的かも知れないけれど、生きる意味は死があって初めて出てくるのではないでしようか」

金閣寺大書院の58面の襖絵も、「竹の子」や「ふきのとう」「わらび」といった、いま生まれたばかりの生命から、樹齢

1500年とも伝えられる「淡墨桜」まで、永遠の生命をテーマに描かれています。

今回は、金閣寺大書院襖絵のために描かれた素描とともに、日展出品作「生（いのち）」「祈り」「黙」「はてなき命」などを展示します。

「生」は横浜三溪園の大きな池に住む一匹の鯉を描いた作品です。この作品に対して東一は次のような感想を述べています。

「絵の中には描いていませんが、池をじっと見ていると、そこには小魚だとか虫などがいっぱいいる。鯉は一匹だけでは生きられなくて、もろもろの生物との共存によって生きている。そんな感じを深く意識したものです。」

「祈り」は、日展出品作としては絶筆となった作品です。この作品を描いて2ヶ月後に突然、老人性急性肺炎で逝去されました。この作品は、中国の「傭」（2頭の馬）を描いたものです。兄栄三が午年であったところから、いかにもあの世から兄が弟東一を迎えにきているような感じの作品です。偶然のことながら死を予感させる感慨無量な作品です。

「絵は見るものでなく、読むものだ」とよく言われます。画家が何を描きたかったのか。何を訴えたかったのか。作品から読み取って欲しいということですが、難しいことです。

わたくしは、このようなとき「よい作品をより多くじっくり鑑賞してください。じっと眺めていると作品が何かを語りかけてきますから」と答えることにしています。

栄三・東一の作品から、「生」の大切さを読み取っていただければ幸いです。



東一作「はてなき命」

岐阜とプロレス???

6月28日～7月29日に特集展示におきまして、「プロレス博物館展 ―岐阜とプロレス・その知られざる魅力―」を開催いたしました。戦後日本のスーパーヒーローといえば、力道山の名は欠かせません。力道山と空手チョップ、街頭テレビ前の群集は、敗戦から復興、そして高度経済成長へと向かう世相をあらわすとともに、当時のプロレスブームとそこに託された人々の夢の大きさを示しています。

岐阜市民センターでもプロレスが興行され、岐阜市のプロモーター、林藤一氏は日本のプロレスの礎を築くのに大きく貢献しました。また、「火の玉小僧」などと呼ばれた名脇役、吉村道明氏も岐阜市出身でした。本展示では、50年以上におよぶ日本プロレス史のなかでもその草創期のようすと、岐阜との関わりを中心に展示しました。

期間中は、当時を懐かしむ方や、「一体なんの展示をしているのだろう」といぶかしがってコーナーに足を踏み入れる方、ワイワイ言いながら体験用のチャンピオンベルトを腰に巻くご家族連れ、2時間以上かけてじっくり展示物をご覧になるプロレス好きの方など、様々な層のお客様に楽しんでいただきました。また、林氏や吉村氏のご親族の方々もご覧になっていただき、貴重なエピソードなどもお話しただけました。



■特集展示（2階 総合展示室内）■

歴史博物館2階の総合展示室の一角に特集展示コーナーを設置し、1～2ヵ月ごとにテーマを設けて資料を公開しています。8月から11月の日程は下記のとおりです。

8月1日（水）～9月2日（日） 「岐阜城千畳敷の発掘調査から」

9月4日（火）～10月14日（日） 「鵜飼の歴史と美～篝の系譜Ⅱ～」

10月18日（木）～12月16日（日） 「美濃国刻印須恵器の世界」

■柳津歴史民俗資料室の展示■

分室・柳津歴史民俗資料室（岐阜市柳津町下佐波西1-15 もえぎの里2階）では、8月から11月まで次の日程で展示を行います。観覧料は無料です。

8月26日（日）まで 「戦中の暮らしと人びと」

8月28日（火）～10月8日（月祝） 「古代瓦の文様～瓦にさいた蓮の花～」

10月10日（水）～11月18日（日） 「濃尾震災」

11月20日（火）～12月24日（月休） 「旅のおみやげ」

研究ノート

長良西野々遺跡の表採資料

—松田亮コレクションから②—

三山 らさ

1. 長良西野々遺跡の資料について

2005年に当博物館に寄贈された故松田亮氏のコレクションは、博物館だより No.61で報告されたように、岐阜市と各務原市で採集された縄文時代から古墳時代の資料1161点からなるものである。コレクションの概要については前述のたより No.61に詳細が記されているのでここでは割愛させていただく。

このコレクションのなかには、岐阜市長良の西野々遺跡において松田氏が採集された土器・石器類の資料115点が含まれている。これらの資料の多くは1970年に刊行された「岐阜市文化財シリーズ3 岐阜市の縄文遺跡（包含地）」のなかで報告されたものである。この遺跡の存在は比較的早くから知られ、昭和27年の小川栄一氏による報告や「岐阜市史」でも資料が紹介されている。岐阜市内では黒野の御望遺跡（縄文時代前期）と並んで規模の大きな集落遺跡であると予想されるが、松田氏の報告以降、現在に至るまで遺跡の詳細がわかるような調査や新たな報告は行われていない。その意味でも当コレクションに含まれる西野々遺跡の縄文時代資料は現時点においてかなりまとまったものであり、松田氏によってその後に収集された資料も含めてあらためて紹介し、遺跡の全貌を解明するための資としたい。

2. 遺跡の概要

西野々遺跡は、百々ヶ峰の南麓から南へ約



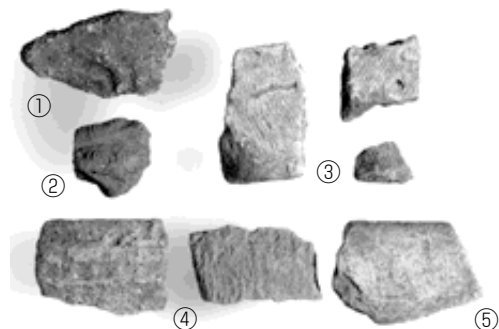
写真① 西野々遺跡で採集された石器

500m離れた、長良川右岸の微高地上に位置している。周辺の縄文遺跡には、龍門寺遺跡、城之内遺跡などがあり、平成5年、真福寺地区の区画整理事業に伴う発掘調査を実施、遺跡の東端の一部を調査した。このときには調査範囲が縄文時代遺物の分布範囲から外れていたため、縄文時代の資料は発見されていない。これまでに前述の小川栄一氏や松田氏によって土器や石器が採集され、縄文時代中期・晩期や弥生時代後期のものとの報告がされている。

3. 資料の検討

資料の内訳は表1に示した。このなかで、「岐阜市文化財シリーズ3」に収載されておらず、この報告以降に採集されたと思われるものは、石皿1点、凹石2点、磨製石斧1点である。石皿は長さ18.0cm、幅13.8cm、厚さ8.5cmで、円礫の表面に直径8cm、深さ3～4cmほどのくぼみを作ったものである。底部は丸く、全体的に敲打ののち研磨成形が施されているようである。石皿は叩石や磨石とセットとして、ドングリやトチなどの木の実や顔料などを砕いたりすりつぶしたりするために使われた、縄文時代を代表する生活用具である。この時期、中部地方の遺跡からは扁平な石の表面を全体的に浅くくぼませた石皿が多く出土し、西野々遺跡でも2点が採集されているが、この資料のようにやや小型で円礫をそのまま使用して厚みを残し小さく深くくぼみを持つものは、ほとんど例が見られない。この時期に見られる一般的なものとは異なるものを加工したり、特殊な用途にもちいたりした可能性も考えられよう。

磨製石斧は緑色の凝灰岩で作られた、定角式とよばれるタイプのものである。石器の両側面をふくらみを持たないようにまっすぐに面取り



写真② 西野々遺跡で採集された土器片

し、平面形は長方形に近い。全体はていねいに研磨されている。およそ全長の真ん中あたりで折れ、刃部側が残存している。磨製石斧はその名のとおり石の斧であり、おもに木の伐採や加工に使用された道具である。この資料のような形をした石斧は、縄文時代中期以降に北陸地方から中部地方を中心に使われたタイプのもので、西野々遺跡のものは在地の石材を用いたものではあるが、岐阜地域の北陸との文化の交流、交易の存在をうかがわせる資料である。

土器片は計48点が採集されている。小さい破片や地文のみの部分が多く、型式を明確に判別することが難しいが、施文が判明するものについてその特徴をまとめた。

①は、幅広の沈線により、弧文を施した口縁部分である。口縁に平行して2本の沈線が引かれ、その下に渦巻の一部と思われる弧文が描かれている。石英の砂粒を多く含んだ暗褐色の胎土で、中期後半の咲畑式に類似する土器である。

②は口縁とその直下に貼り付けられた隆帯の上に、半分に割った竹のような道具で連続した爪形文が刻まれている。縄文時代中期前半の北裏C1式土器に見られる特徴である。

③は細い櫛状工具で縦方向の条線が全面に施されている。同一個体かと思われる破片が口縁部と底部を含む7点採集されている。表面は白褐色で焼成はよい。70年の報告では縄文土器として分類されていたが、もう少し時代が下がって弥生時代の甕であると考えられる。

このほか、地文にヘラ状工具や竹管状工具によって沈線が施されているもの8点、縄文を施したもの1点、縄文に似た、編み物状のものを押し付けたかのようにみえる痕跡が施されたもの

1点(④)がある。いずれも胴部の破片であり、縄文中期～晩期の土器と見られるが型式を特定するにはいたらなかった。無文の鉢とみられる口縁部1点(⑤)は、厚みがあり、胎土、焼成ともに良好で全体にていねいに器面が整えられ、内側には口縁のすぐ下にまで炭化物が付着している。

4. 遺跡の立地と性格

岐阜市史に報告された資料を含めて西野々遺跡の縄文時代資料全体をみると、中部地方の縄文時代中期の遺跡に見られる基本的な道具がそろっている。石器の組成や量的にも同時期の各務原市の炉畑遺跡との類似点があり、ある程度まとまった規模を持った集落遺跡であることは明らかである。しかし、遺跡の立地に関して、これまで炉畑遺跡に代表されるように同時代の他の規模の大きな遺跡が沖積地を見下ろす台地上に位置するのに対して、西野々遺跡の沖積地のなかの微高地に位置するという点が特殊であり、生産基盤が異なるのではないかという可能性も指摘されてきた。今回、特殊な形態の石皿を報告することができたが、その役割の解明については今後の課題である。しかし、そのほかの採集資料を見る限り、西野々遺跡が台地上の遺跡に比べて特に異なる特徴を持つということを読み取ることはできない。この点については、今後、遺跡周辺の地形・環境を含めたより詳細な景観の復元や、同時期の周辺遺跡との関係性の検討が必要となるだろう。発掘調査が行われないなかでは、これまでの採集資料を最大限生かしていくとともに、発掘によらない方法でいかに遺跡の情報を集めるのか、ということが今後ますます重要な検討課題になるのではないだろうか。

器種	数量	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考	器種	数量	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
打製石斧	1	9.9	5.4	2.7	撥形	磨製石斧	1	7.2	6.4	2.9	定角式 精緻なつくりで刃部側2/1が残存 ◎
打製石斧	1	12.0	3.7	1.5	短冊形	石皿	1	24.3	19.5	6.3	2/3残存
打製石斧	1	9.8	4.4	1.7	磨製石斧転用	石皿	1	15.0	7.7	3.0	破片
石錘	1	8.5	6.4	1.7	1点のみ大型	石皿	1	18.0	13.8	8.5	小型 円礫にくぼみをもたせたもの ◎
石錘	14	-	-	-		叩石	1	8.4	6.4	4.4	◎
木葉形尖頭器	1	4.4	3.5	4.8		叩石	1	9.8	8.0	8.5	◎
石匙	1	6.5	3.7	7.0	縦型	叩石	1	9.4	8.6	7.5	
石匙	1	2.4	2.6	4.7	横型	凹石	1	11.0	12.2	8.0	片面中央1ヶ所に凹部 磨痕あり
石錘	1	2.6	2.1	0.9	先端折れ	凹石	1	10.5	9.6	6.5	片面中央1ヶ所に凹部 磨痕あり
石錘	1	2.6	2.4	1.0	先端折れ	土器片	48	-	-	-	
石鏃	16	-	-	-		土錘	1	3.2	1.4	1.4	
搔器	1	3.1	3.2	2.6	拇指状搔器	礫破片	1	16.5	6.3	4.0	石斧未製品か
剥片・未製品	14	-	-	-		不明石片	1	10.2	3.7	2.4	
小型磨製石斧	1	4.9	3.2	1.1	定角式						

※ 紙面の都合上、資料数の多い器種については計測値を割愛した。
◎は1970年の「岐阜市文化財シリーズ3」以降に採集されたもの

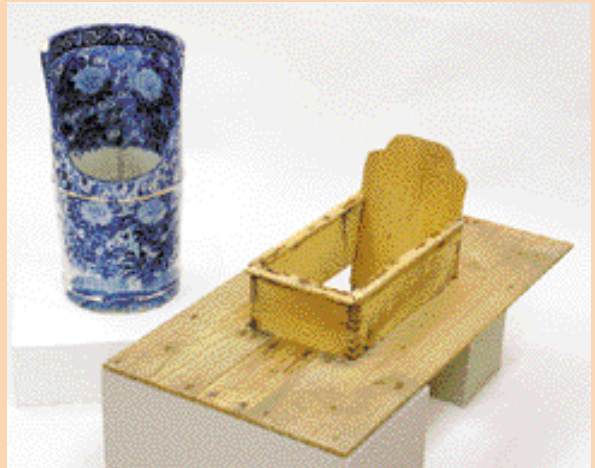
***** 館蔵資料紹介 *****

右) 樋箱 (箱部長46.5cm、幅26cm、高29.4cm)

左) 染付草花紋向高便器 (径59.3cm、高59.3cm)
むこうだか

私達の生活に欠かせない「トイレ」。当資料は各務原市の旧柴山家住宅で使われていたものです。当住宅には、敷地内に外便所、母屋と離れに上便所が備えられており、この2点は、その内大正時代に建てられた離れの上便所で使われていました。

現在は衛生陶器を便器に使用した水洗式便所が大半ですが、当住宅の外便所と離れは汲み取り式のまま残り、それぞれ素焼きの肥甕を土中に埋めて糞尿を溜めていました。大便器である樋箱は、杉の床板に方形の穴をあけ、そこへ金隠の板をつけた底無しの桧製木箱をはめ込んだものです。通常は床板に直接金隠を取り付ける例が多く、当住宅の外便所もその形式でしたが、この樋箱は来客時の利用も考慮して箱型にしたようです。古くは室内で排便する際に箱がもちいられており、その遺制とも考えられるでしょう。



向高便器は、陶製の小使用便器で、胎土の上に白土が化粧掛けされ、呉須で草花を手描きしています。底に丸穴が開いており、床板にあけた穴を通して肥甕に落ちる仕組みです。この種の陶製便器は明治20年代から装飾性豊かなものが数多く生産されました。

ちなみに、現在の和式便器と同じ小判形の便器の製造が始まったのは明治30年代から、衛生陶器が国産化されたのは大正時代からといわれています。便器ひとつをとっても、そこに人々の生活と、生産技術の移り変わりが鮮やかに反映されています。当資料は柴山新二氏の御厚意により、建物解体前日夕刻に取り外すことができました。ここに改めて御礼申し上げます。

利用の御案内

■ **開館時間** 午前9時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)

■ **休館日** 毎週月曜日と祝日の翌日
(月曜日が休日の場合は翌日)
※特別展期間中は変更することがありますのでご注意ください。

■ **観覧料**
歴史博物館常設展、加藤栄三・東一記念美術館
高校生以上 300円 (団体240円)
小・中学生 150円 (団体90円)
両館共通で観覧される場合
高校生以上 500円 (団体400円)
小・中学生 250円 (団体150円)

※団体は20名以上。市内の小・中学生は無料
企画展 常設展料金で御覧いただけます。
特別展 そのつど定めた金額。

■ **交通案内** J R岐阜駅・名鉄岐阜駅より岐阜公園または長良橋経由バスにて約15分、「岐阜公園・歴史博物館前」下車、すぐ東に歴史博物館があります。

加藤栄三・東一記念美術館は、公園内ロープウェイ乗場すぐ隣です。

博物館だより No.66 2007. 8

編集・発行 岐阜市歴史博物館

〒500-8003 岐阜市大宮町2-18-1 ☎058(265)0010

(分館) 加藤栄三・東一記念美術館

〒500-8003 岐阜市大宮町1-46 ☎058(264)6410